# 稲荷岩陰遺跡発掘調査報告

（大分県大野郡朝地町大恩寺稲荷）

羽田野一郎
坂田邦洋

## (一) はじめに

阿蘇外輪山麓に源を発する大野川は、東流し、その途中蛇行して、曲所に切りたつた磨崖を作つている。この大野川中流にはその崖の各所に岩陰が見られ、洞穴（岩陰）遺跡の基礎調査が行われるにつれ、その重要性が指摘されはじめた。日本考古学協会洞穴遺跡特別調査会の九州地方昭和三十八年度発掘地として取り上げられた大分県大野郡朝地町大恩寺稲荷岩陰は縄文前期の重要な人骨埋葬の遺跡であつた。この稲荷岩陰は、稲荷信仰によつて、かつて土層上面を整地カットされた。しかし下層は洞穴特有の整然とした層序をなし、轟貝塚出土の所謂轟式土器と言われていたものを、地層的に分類することが出来るとともに、南九州に多く分布する塞ノ神式土器との関係も同時に把握することができた。加えて、轟式土器にともなう屈葬人骨八体と集石遺構とを同一地層より発掘した事は重要であつた。

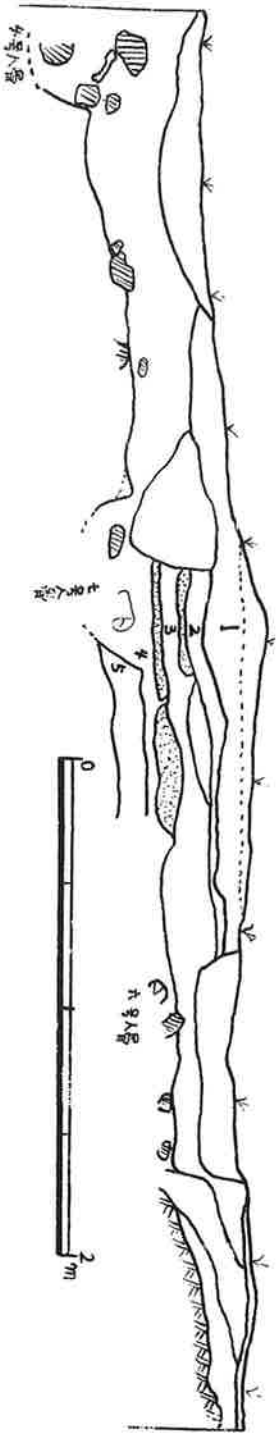
## (二) 遺跡の状態

### 1 岩陰

岩陰遺跡は凝灰岩の旧浸蝕面にあたり、現在大野川川面より三三米の高所に所在している。岩陰は東西に面して横十二米、高さ四米、最奥部五米、テラスは岩陰の奥部より六米の所から急傾斜して崖下にいたる。

2　層位（第一図）

岩陰前面に堆積した土層は前方に傾斜し、北方（岩陰むかつて左側）にいちぢるしく傾斜する。岩盤もほぼ地表と平行に北に傾いていた。地層で左側に厚く右側は一部層位を欠く。これらの層は上下層共に縄文前期の単純遺物の包含をみる。




第一図　層位

3　遺物出土状態

口辺部が朝顔状に開くのを特徴とする塞ノ神式土器は五、四層に限つてみられた。遺物の分布状態は灰が多い北側に濃くみられた。石器では石鏃が大部分を占めるが、土器同様絶対量は少い。獣骨は数量的に多く、イノシシ、シカがその大部分であり、中にはうさぎなどもみられた。

㈢　遺　物

1　土器

絶対数が少ない為、それのみをもつて結論とするには多分に危険性をもつているが、一応この少数の土器を基に報告する。

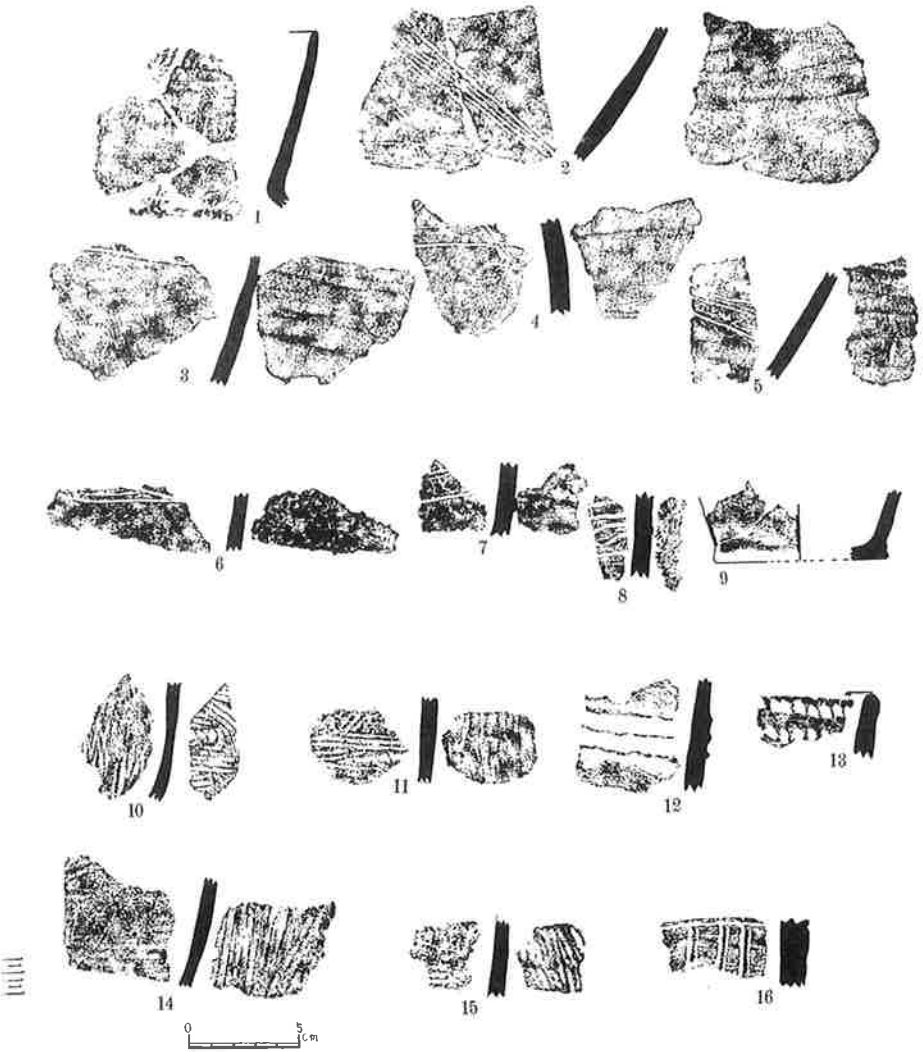
遺物包含層は5層位中、1、2層及び3、4、5層の二つに大別する。4層は人骨包含層である。下層に行くに及び1、2（上部遺物包含層）、3、4、5（下部遺物包含層）と呼ぶことにする。5層（黒色落石含土層）、4層（細礫褐色含灰層）

轟A式土器と呼ばれている土器（第二図1）と塞ノ神式土器（第二図2―5）とが見られた。前者は口辺が外反し、首がしまり、貝殻押圧文が口辺を3周している。茶色をなし、雲母を多く含んでいる。胎土は良質だが焼はよくない。口経二四糎、口唇部はややとがつている。施文の方法は塞ノ神式又は柏田式に以ている。

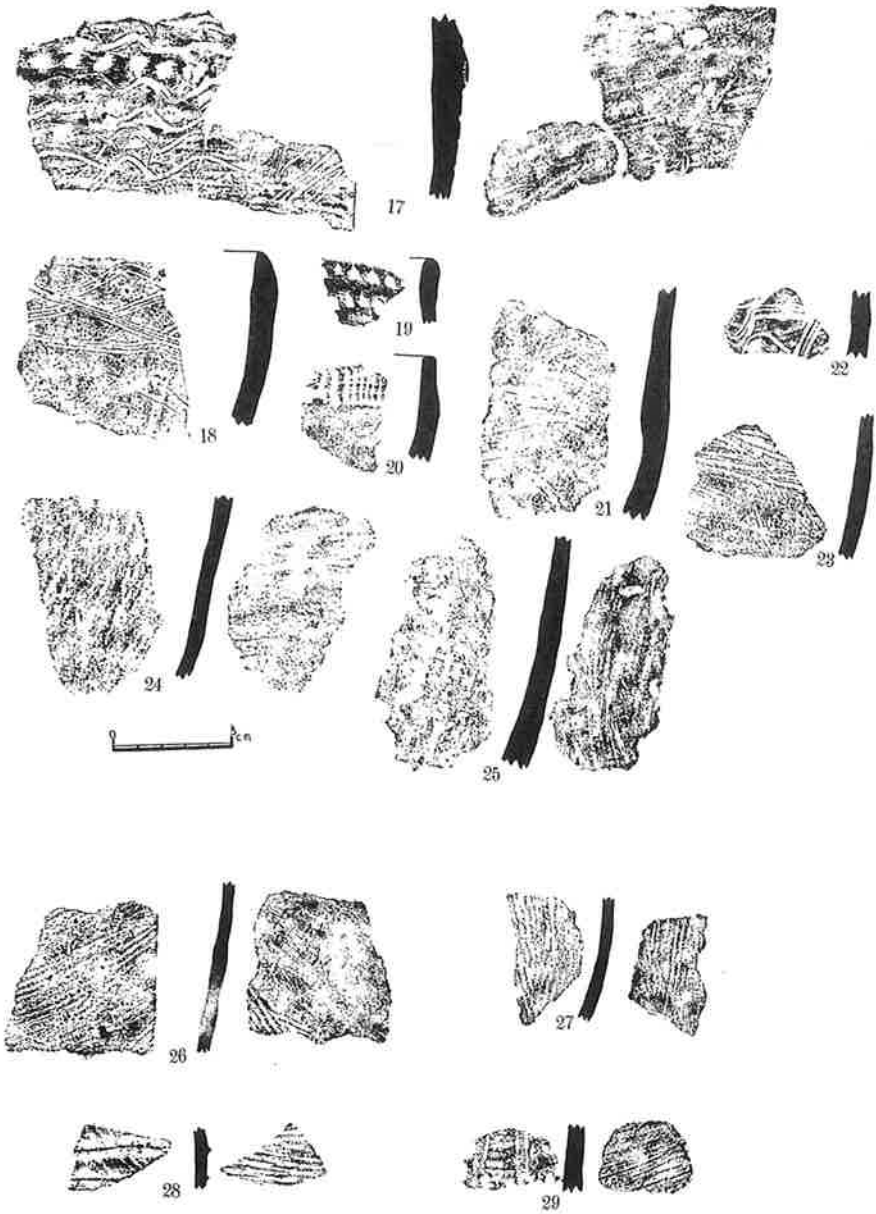
塞ノ神式土器は4層から二片出土しただけで、他は全て5層から出土した。半割竹管らしきものを用い、外面に四、五本の沈線文を一単位として、ほぼ直線に近い構図を作る。内面はヘラ状の工具で器面調整をしている。完形を残していないので器形が明確でない。文様は轟式土器に以ている。しかし器形は塞ノ神式であり、雲母を多く含み、褐色をしている。胎土、焼成共に良い。5層における轟A式土器は塞ノ神式土器と共存する事が明らかになつた。又塞ノ神式土器片2及び貝殻擦過による条痕文土器（第二図8）数片が出土した。この土は5層出土の塞ノ神式土器と同一個体である。従つて、遺骸埋葬の土拡を作る時、5層にあつたものが掘りおこされたものと解釈した。他の遺物が5、4層共通に混在して包含される点から、両層を同一文化層とした。又3層暗褐色含小礫土層は薄手土器片も若干見うけられたが、主として厚手の円筒形土器の包含が目立つた。貝殻条痕文（第三図21・23・24）、貝殻腹縁押圧文（第三図20）、沈線文（第三図17 18 22）、無文（第三図25）、刺突列点文（第三図19）土器などの出土をみる。

貝殻条痕文土器は内面は横方向にほぼ一定に条痕がみられるが、外面は方向が一定していない。条痕が大きく、器壁は5～10㎜程度の厚さを持つ。

貝殻腹縁押圧文は口縁直下に一列に施文される。平縁で口唇部は平らであり、わずかに外に張り出しながら幾分内側に湾曲している。胎土は悪いが、焼成はかなりよい。




第二図　層位別土器拓本




第三図　層位別土器拓本

沈線文土器は大別して(イ)・(ロ)に分つ。

(イ)半割竹管らしきもので、三、四本の沈線を一単位として、文様構成をしている。（第三図18）、口縁部でやや厚みをましながら、わずかに内湾する。口唇部は平らである。黒褐色で胎土、焼成共によい。

(ロ)ヘラ状のものによる沈線文土器（第三図17、22）口縁近く外側が強く張り出しており、この部分に半割竹管らしきもので押圧し、多少擦過痕と思われる連続列点文があり、他の面はヘラ状のものによつて、波状沈線文を施す。器形は、円筒形、胎土に非常に多くの大形滑石を含んでいる。褐色で焼成良好。

無文土器は円筒形の土器で、非常に多くの大形滑石を含む。器面に別の粘土をぬりつけて調整をしている。黒雲母が多く含まれ、胎土、焼成良好である。

刺突列点文土器は三角形刺突文のある口縁部である。口縁は幾分外反する。口唇は丸みをおび、胎土、焼成共に良い。

3層は4層の貝殻条痕文又は細線刻文などの共通した施文法をみる為、文化層では4、5層と同時に下部包含層として一括した。

2層貝殻条痕文（第三図26、27、29）、隆起線文土器（第三図28）を主体とする。

貝殻条痕文土器、条痕は小さく条痕の方向もほぼ一定している。

隆起線文土器、隆起の間隔は一、五㎝で、隆起部をのぞいて全て条痕部がみられる。隆起の断面をみると、底部4㎜、高さ2㎜の二等辺三角形である。貝殻条痕部の上をつまみによつて隆起線を作つている。内面は貝殻条痕文である。

1層隆起線文（第二図12）、貝殻条痕文（第二図10、11、14、15）、沈線文（第二図16）、刺突文（第二図13）土器に大別される。

隆起線文土器は三本の隆起をつまみによつて作り出し、その断面は丸みをおびている。隆起線の間隔は7㎜である。他の部分は条痕はみとめられない。器壁は厚さ7㎜で黒褐色をなし、黒雲母を多量に含む。

沈線文土器、厚手の器壁外面にハケ状のもので器面調整をなし、その上を二本を単位とした沈線文を直角に交叉させる。

刺突列点文、刺突文が半円をなし、口唇部は丸みをおびている。

2、1層は共に隆起線の施文をみる点で、共通の文化層に分け、上部包含層として一括した。

2　石器（第四図）

3層（第三図11～23）出土の石鏃は、切りこみが半円状になり、柄が横に直線で若干のびる。この外不整形な石鏃が3層に限つてある。（15は尖頭器形石鏃と称するのを適当とする。）

2層鍬形石鏃（第四図3～10）、鍬形石鏃は二種類にわける事ができる。

(イ)柄の部分が丸みをおび、切りこみが深く丸みがかつた石鏃である。（第四図10）。（第四図7・8・9）

(ロ)柄がとがり、切りこみは両柄から直線になつている。

1層石鏃は（第四図1、2）長さ3㎝肉厚の長二等辺三角形で姫島系黒耀石である。

以上石鏃は1、2、3層より発見され、4、5層ではみられなかつた。大きく変化をみると、3層の半円状の切り込み→2層鍬形石鏃→1層二等辺三角形へと変化があつた。

石匙は2層（第四図26）より出土し、姫島系黒耀石を併用する。表裏共に剝離された横匙である。

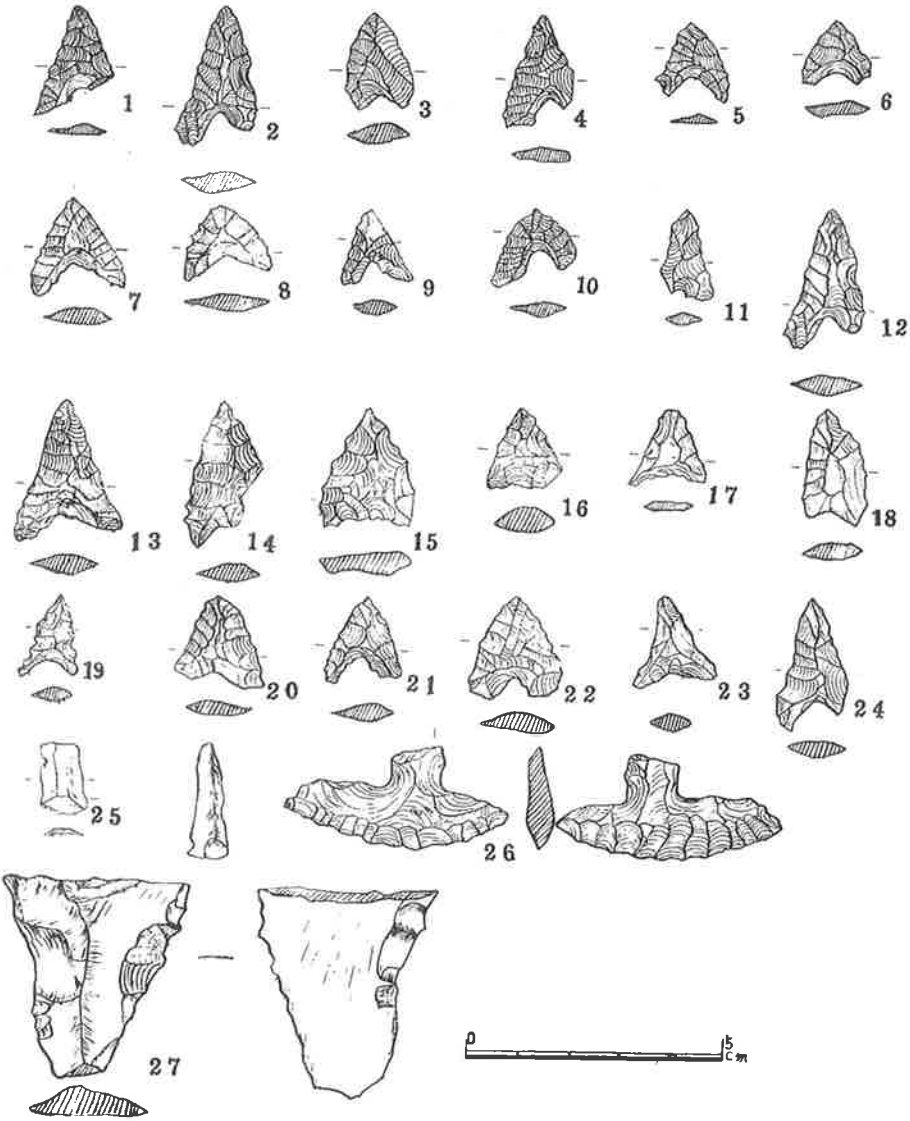
小形石刃一個が2層より（第四図25）発見された。姫島系黒耀石を使用する。

掻器2層（第三図26）より出土し、縦4㎝、横3㎝、中央に稜線をもつ。二辺の剝離の面がことなつているのが特徴である

凹みのある石（第五図）、安山岩又凝灰岩の長楕円の自然礫を利用する。直経2㎝、深さ1㎝で凹は逆円錐である。内部は小さい凹凸が多く、凹みの一方外側がすりへつたあとがみられる。

3　骨角器（第五図）

イノシシの牙をヘラ状に加工している。(第五図3）先がかけているが、この部分を使用した為と思われる。4層出土。第五図4は長さ9㎝で上部は自然の骨、中ほどが扁平にふくらむ、先端は丸く尖つている。4層出土その外に長さ五糎程度の断面




第四図　石器実測図

が丸いピン状のものがある。（第五図5～8）

4　副葬品

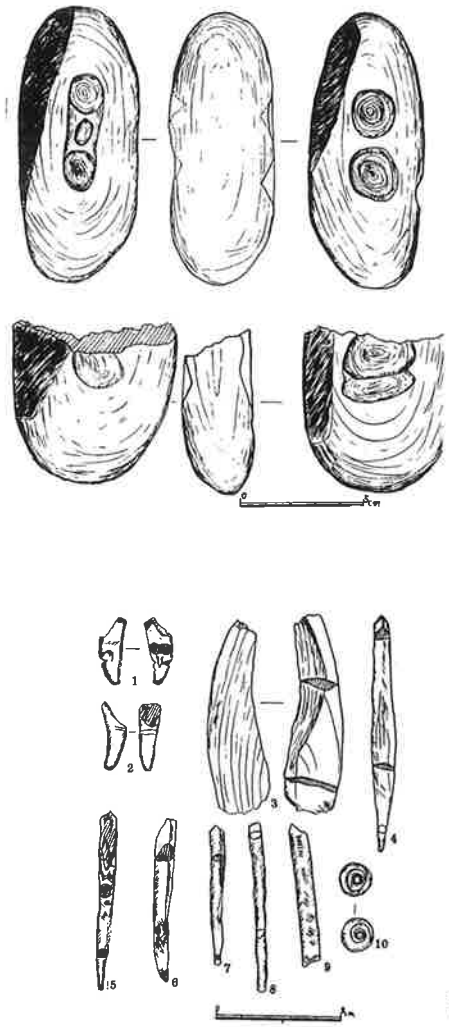
第五図1は集石遺構（大形）の土拡内より出土し、大小二本の切り込みが入る。第五図2は一層より出土。貝製品はマイマイ貝の中央に直経3㎜の孔をあけ、第7号人骨足の附近より発見した。（第五図10）

5　自然遺物

①カワニナ（圧倒的多数）、②シオフキ、③ハマグリ、④キセル貝、⑤アサリ、⑥タニシ

## 四、人骨埋葬

### 1　人骨埋葬



第五図　石器、骨角器実測図

三様式が確認できた。

(イ)直経三〇糎の土拡内に遺骸と共に灰をつめ、その土拡上の一方にかなり大きい板石を立てる。土拡は直経、深さ共に三〇糎、その中央に東頭位、座臥屈葬状態であつた。土拡上面北側に縦40㎝、横30㎝の板石が土拡を少しおおう状態で立てられていた。

(ロ)楕円形、深皿状に土拡を作り遺骸に径20㎝程度の凝灰岩を積石する。4号人骨は出土土壙南北に長く、長経一㎡、短経50㎝の楕円形の皿状に掘られ。南頭位、顔面を東にむけた横臥屈葬で20㎝程度の凝灰岩積石がみられた。

(ハ)抱石葬3号人骨には土拡の状態を検出出来なかつたが、頭蓋骨に近い部分に30㎝程度の川石一個を抱石状に安置していた抱石葬とみてよい。

| 年令 | 性別 | 番号 |
|---|---|---|
| 熟老 | 男 | 1 |
| 不明 | 女 | 2 |
| 熟年 | 男 | 3 |
| 熟年 | 男 | 4 |
| 壮年 | 男 | 5 |
| 壮年 | 男 | 6 |
| 幼児 | 男 | 7 |
| 不明 | 男 | 8 |

人骨はほぼ南北一列にならび岩陰渾下に近い位置をしめる。

2　集石遺構

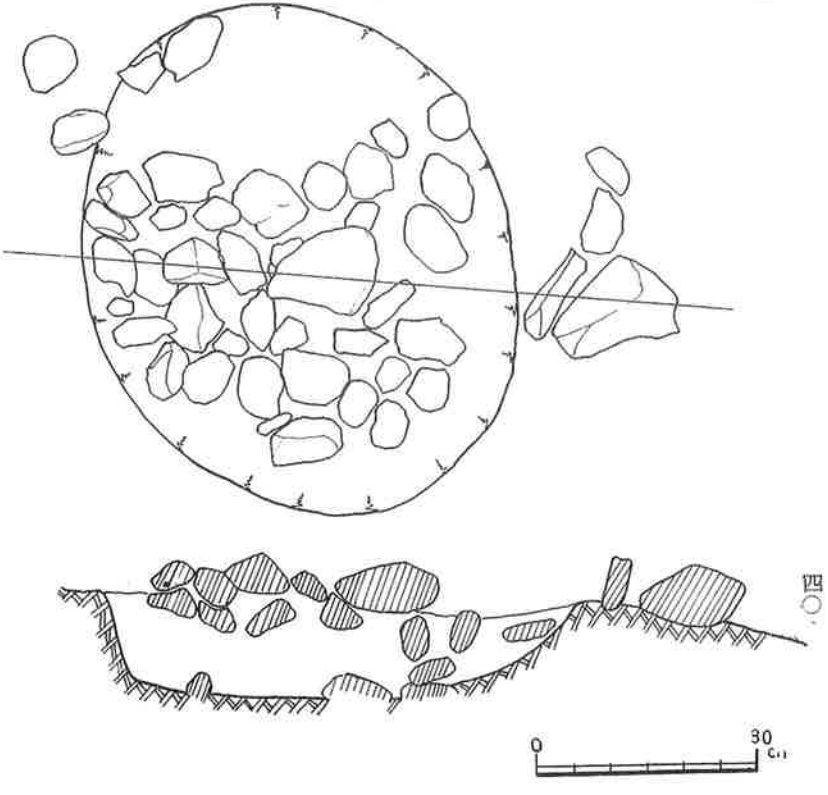
大形、小形の二種類ある。

(イ)大形集石遺構経2㎡の円形に深さ30㎝程度の浅皿状で中央がわずかに高くなる。石は径10㎝程度の川石をつかい、土拡の外周は整然と配石され、内は集石状態であつた。集石は土拡内で三つのブロックに分かれている。集石の上面は中央に向つて凹んでいる。

(ロ)小形集石遺構径60cm円形、深さ30cmで直径5cm程度の川石を数箇その上面に集めていた。土拡内は灰でみたされていた。（第六図）

## 考　察

京都大学考古学研究室①調査報告による轟式土器は熊本県宇土市轟貝塚出土土器の名に冠した名称である。この土器について故小林久雄先生などにより細分類②が行なわれた事もあるが、近年熊本大学松本雅明教授による同貝塚の再調査③が実施されてここに轟式土器の編年的研究が一応成立した。これによると、押型文土器、曽畑式土器との関係を論じ、さらに轟式土器自身の層位的分類がなされたが、私には数ケ所において④疑問の点があつた。最近熊本県尾田貝塚が田辺哲夫先生によつて発掘され、轟式土器、曽畑式土器が層位で把握され、轟式は曽畑式の上層を占めることがわかつた。押型文土器と同一施⑤文具から発生したと考えられる曽畑式土器は、




第六図　小形集石遺構

押型文土器と早期全般にわたると考え、曽畑式土器は早期末葉に位置ずけると考察される。曽畑式の後に現われる轟式土器貝殻条痕文は前期前葉における器面調整としてあらわれると解されるので、

曽畑――┬轟A――轟B
　　└塞ノ神

となる可能性が強い。この点を本稲荷岩陰の調査において層位的に再確認を得たのである。

遺骸埋葬については、実に問題多き状態を提起することが出来た。その第一は土拡内灰詰め状態など特殊遺構の存在で、他の7屈葬遺骸の存在と共に非常に興味深い群墓であつた。前記大型集石墓、小型集石墓など前期遺構としては稀有なもので、九州において類例をみない。又灰詰の土拡内の幼児骨の座臥屈葬も灰の為に保存されたごく稀にみる状態の遺構であつた。又特異な例として4号人骨は、両足指骨が刃物状工具で切断された如き状態で欠除していた。この足指骨は調査進展と共に、切断して胸部に安置させた一例として注目すべきであるが、ここにも前期墓制史上一つの新例をみる事が出来た。

本人骨の群集から本遺跡の4層堆積時は墓地として岩陰の使用があつたと思われる。その墓標的存在の遺構が8号灰詰土拡である。即ち、土拡壁に立石をなし、土拡の位置を定めたと解す。しかも幼児遺骸のみにこの方法がもちいられていたことは留意すべきであろう。

追記　遺物整理中に獣骨（縦5㎝横2㎝）に、人物とも獣類とも判明できる陰刻線の絵画文様が存在しているのをみた。獣骨絵画としては本邦における唯一のものであると考えられるが、北海道根室地方発見の漁撈絵画（縄文以降）を他に一列を知るにすぎない程度に稀な出土品であつた。

本発掘に御協力下さつた田辺哲夫先生ならびに竹田、大野、宮崎、玉名高校考古学部の方にも深く謝す。

注
① 浜田耕作「肥後国宇土郡岸村管荘貝塚発掘報告」『京都大学考古学報告』第五号
② 小林久雄『人類学・先人学講座』第九巻
③ 松本雅明、富樫卯三郎『轟式土器の編年』（「考古学雑誌」第四十七巻第三号）
④ 熊本県玉名郡天水町尾田に所在し、昭和37年田辺哲夫先生を団長に発掘され、同先生により御教示いただいた。
⑤ 賀川光夫、坂田邦洋『曽畑式土器に対する一考察』（「九州考古学」第22号一九六四年）

（この研究は文部省科学研究費により、日本考古学協会と朝地町共同調査で、朝地町より研究費の一部を受けた）